

近代英国翻訳論 —— 解題と訳文 ロスコモン伯ウェントワース・ディロン『訳詩論』(抄)

大久保友博

(京都大学大学院人間・環境学研究科博士候補生)

本稿は、17世紀の貴族ロスコモン伯ウェントワース・ディロンが書いた翻訳論の本邦初訳を試み、その理解に必要な情報も併せて簡便に提供するものである。構成としては、まず当人の伝記的事実に短く触れ、そのうち『訳詩論』について、底本テキストの検討、内容・背景についての解説、そして日本語による抄訳の順に、まとめて記述する。

0. ロスコモン伯ウェントワース・ディロン小伝

第4代ロスコモン伯ウェントワース・ディロン (Wentworth Dillon, the 4th Earl of Roscommon) は、幼少・青年期をフランスで過ごし、1660年に英国へ帰還、そして名誉革命前に死んだことから、典型的な王政復古期詩人と言える。生まれたのは1637年、故郷はアイルランドのダブリン、洗礼名は当時アイルランド総督であった伯父のストラッフォード伯トマス・ウェントワースから取られたことからわかるように、その時代に権勢を誇った名家一族の生まれであった。

一族の子として目をかけられ、次第に不穏になってゆくアイルランド情勢から、生まれてまもない時期に伯父のお膝元ヨークシャに移されて幼少の教育を受けた。ところが当の伯父が主教戦争による国内混乱の責任をとらされ1641年に処刑、一族の立場も危うくなり、ディロン本人も暗殺されそうになる。そのあと英国は内戦が激化していき、追いつめられた王党派の多くが大陸へ亡命するが、スコットランド内乱が起こるにあたり幼いディロンをもはやヨークシャに置くことはできず、安全のため伯父の秘書であった人物を教育係にして、留学名目で疎開させることに。行き先は、フランスのノルマンディにある親英国的な大学街カンだった。

ディロンを引き受けたのは、オックスフォードに縁ある古典・東洋学者のサミュエル・ボシャルで、少なからぬ英国人とともに現地のコレージュおよび大学で高等教育の手ほどきを受けたと思われる。ディロンの父はその後国王軍に参加、破れたあとは議会軍に抵抗するアイルランド同盟軍に荷担するも、息子がフランスに渡って数年を経た47年に捕虜となり、その二年後には亡くなってしまう。そうして異国の地でひとり一家の主となった青年は、50年代の半分以上をカンで過ごしたあと、57年あてもなく大陸旅行に出、まずド

イツを巡り、同じく青年貴族のウィリアム・キャヴェンディッシュとフランスからイタリアまで半年ほど道連れになりつつも、ひとりローマへと辿りつき、しばらく逗留している。

やがて 1660 年に王政復古が成ると、帰る場所ができたとしてディロンはすぐさま英国へ戻るが、爵位を取り戻した若き伯爵を迎えたのは、熱狂のロンドンであった。内戦・共和制と続いた大混乱と息詰まる時期を抜けたイングランドでは、とりわけ中流・上級階級を中心に、王の帰還が闇のあとにきた光のごとく大歓迎されたのだ。王の気質や経験も相まって都会的洗練が重要視され、趣味がひとつの価値観となり、〈美しい〉とされる様々なものがフランスから持ち込まれた。この陽気で打ち解けた上流の雰囲気、20 代前半のロスコモン伯も魅了され、とりわけ室内遊戯として流行したカードゲームに没頭してしまい、賭博がらみの決闘にも巻き込まれつつ放蕩の日々を送る。

一通り遊んだロスコモン伯は 1662 年、申し立てををしていた父・祖父の財産・地所の回復が認められ、結婚もしたこともあってか、同年アイルランドの議席を得て生地ダブリンへ帰郷することに決める。その地でまず関わったのが公讃文芸であった。一時的にできた文芸同人に親類の縁から参加し、寛容なカエサルの登場する舞台上演に携わって、アイルランドにおいて君主讃美の空気を盛り上げたのである。その後のロスコモン伯は 20 年ほどのあいだ公務に専念し、軍人として各地へ赴いたり、あるいは要人の側近としてつき従ったりなどする。妻の死や再婚、子どもの夭逝や二度目の愛別を経て、1680 年頃、伯はロンドンに腰を落ち着ける決心をするに至る。

このときロンドンの社交界・文芸界への名刺として出版したのがホラーティウス『詩論』の翻訳だったのだが、そのロンドンでドライデンの知遇を得、ロスコモン伯は貴族として文士のパトロンの役割を果たすとともに、1682 年頃〈アカデミー〉と称する自らの主宰する集まりを開くに至る。そのなかでアカデミーのメンバーを鼓舞する『訳詩論』を書いたのだが、これは顧問的立場にあった文壇の大物ジョン・ドライデンの仲介によって 1684 年に出版され、同年中に再版が決まるほど好評のうちに迎えられる。今後の活躍が期待されたロスコモン伯であったが、再版のための推敲後、チャールズ 2 世崩御の直前の 1685 年の 1 月に痛風で急死してしまう。余生をローマで過ごしたい、ローマのようにイギリスの文芸が輝くのを目にしたいと願っていたようだが、その夢は叶わずじまいであった。

1. 底本テキストについて

代表的なテキストについては、詩単独の初版 (380 行/1684 年)・再版 (408 行/1685 年)・著作集に収められたもの (同/1717 年) の 3 つがあり、再版にはファクシミリによるリプリントがある上、再版・著作集に基づくものが近年刊行された書籍・論文にも収録されている。古くは (Spingarn 1968) がよく読まれていたが本文批判がしっかりなされておらず、これを底本にする (Steiner 1975) やそこから孫引きした (Robinson 1997) についても同様に信頼することができない。『訳詩論』には版のあいだでかなりの改訂・追記があり、それぞれを同一視できないため、テキストに対する検討は慎重を期さねばならない。

本文に対して初めて綿密に考察したのが博士論文 (Niemeyer 1933a) で、その成果に立

脚して別の博士論文 (Widmann 1967) が校訂版を制作している。そして普及版としては、17～18 世紀の文芸評論をまとめた作品集 (Womersley 1997) に収められたものが、異同を詳しく注に記しており、読むに値するものとなっている。

本稿では、より翻訳アカデミーの空気に近いものとして、以下の初版のテキストを用いて翻訳するが、その本文検討の際には上記 3 つの先行研究を大いに参考にした。

Dillon, W. (1684). *An Essay on Translated Verse*, London: Tonson.

2. 内容・背景について

この『訳詩論』を読む上で注意しておきたいのは、最初から出版目的のものでなく、あるサークル内で共有するものとして書かれたことだろう。王政復古期の終わり頃、世はちよどクラブの勃興へと向かう時期で、ロンドンのコーヒーハウスの発展はめざましく、すでにそこで語り集う人々が一定層生まれていた。文芸においてウィルズ・コーヒーハウスで多くの取り巻きを相手に文学談義を行う桂冠詩人ドライデンは、主宰として輝く存在で、コーヒーハウスは貴族の邸宅とともに才人の交流する場となり、前者は新しいものとして識者に胡散臭く目されつつも、議論の場としてだけでなく、様々な紳士のたしなみ、たとえば語学や歌、踊りや数学・天文学のレッスンを授ける所ともなり、参加に地位や財産を問わないカルチャーセンターになりつつあった。

そんななかロスコモン伯が自らの館で開いたのが〈翻訳アカデミー〉なのだが、その実態については今もなお誤解されがちである。アカデミーという名称から王立協会やフランス王立アカデミーに結びつける論者は後を絶たないが、前者の普遍言語運動とも後者の辞書制作事業とも何ら関係がないし、資料そのものがその可能性を否定している。実際は翻訳のための輪読会・合評会めいた集まりであったのだが、ロスコモン伯はその人生のうちで関わったふたつの文芸サークルに強い影響を受けており(そのひとつについては拙稿(大久保 2013)ですでに述べたが)、とりわけ「カンのものを真似て」始められたことが、参加者の友人ナイトリー・チェトウッドによって記録されている。

カンとは、11 世紀にウィリアム制服王が城を築き、そして百年戦争中の 1432 年、英国がノルマンディを征服したときにヘンリ六世の勅許によって大学が建てられた、フランス北西部にある山間の小さな城塞都市である。早くから総合大学を持ち、印刷術も発達した文芸・学問に馴染みある土地で、その縁起からフランス領となって以後も英国と織物や石材の貿易で深いつながりがあり、当時は低地ノルマンディ地方の中心地、軍人・学者・官僚・貴族の集まる場所でもあった。

そこへ若きロスコモン伯は 1640 年代から 50 年代にかけて 10 年以上滞在していたのだが、そのあいだに出会える〈アカデミー〉はひとつしかない。アカデミア・ブリオーサまたは会合場所の名前を冠してアカデミー・デュ・グラン・シュヴァールと呼ばれた知識人たちの文芸サークルである。これは城の門前の教会広場に面した街随一の大邸宅で開かれたもので、1651 年には定期的会合が持たれるようになっていたという。元は月曜の午後パリ

から届く雑誌・新聞・手紙・荷物などを広場で待つなか霧雨に降られ、逃げ込んだ近所の印刷所で一緒になった紳士らが時事の話題や意見を交換したところから始まったらしい。のち雨宿りに提供されたその邸宅で文学談義が盛んになったことから、毎週月曜の午後五時から七時までと時間を決めて、男性限定のサークルとしての活動に興じることとしたようだ。

当時のフランスの地方に出来始めていたアカデミーは、けしてパリのものの劣化コピーではなく、それぞれの地方に住む人々の興味や街の文脈に沿った独自のものであったという。カンの場合は、とりわけ文芸に重きが置かれ、会合ではパリから届いたばかりの定期刊行物を題材に時事を論じたり、それぞれが読書するうちに直面した文学上の問題（たとえば語法や校訂・解釈など）の解決策を話し合ったり、あるいは自作の詩や訳詩（の草稿）、またはメンバーに送られてきた作品などを読み上げたり、みなで批評を加えたりなどした。楽しみよりも知的向上を目指し、何より輪読・合評の性格が強いのであったが、ただ街の特性から中傷と宗教論争だけは禁じられた。様々な人々の住むカンでは、それぞれの持つ宗教も多様であり、たびたびいざこざが起こっていたからだ。その代わり男に限られるが貴族も学者も地位や党派に関係なく参加でき、気兼ねない発言ができる場であった。

ただしカンの街の人々がすぐさまこのアカデミーを好意的に受け入れたのではない。サロンと違って出入りする人や時間が自由でない、決まった時間に限られた人々が集って議論するアカデミーのやり方を人々は受容するどころか、不穏分子が危険活動を企んでいるのかと誤解した。またフロンドの乱以降フランスでは私的な会合が違法であったから、まだ勅許を得ていない当初のアカデミーは通行人からも怪しまれる存在であった。上記の事情を踏まえたとき、その時代のカンに住んでいたロスコモン伯が、アカデミーを模倣すべきものとして肯定的にとらえていることは注目し得る。チェトウッドがわざわざ記憶していることから、当人が活動のなかで何度も自覚的に口にしていたと考えて間違いない。

大学関係者や出身者からも理解されなかったアカデミーの実状を、ロスコモン伯はどうして知り、なぜ後年真似しようとしたのか。ひとつ考えられる理由としては、彼の身元引受人ボシャルとその高弟でのちにその翻訳論で有名になるピエール・ダニエル・ユエの存在があろう。引受人として名が挙げられるとはいえ、実際ロスコモン伯とボシャルがどこまで深い関係であるかはわかっていない。しかし英国でも高名な彼を頼ったとすれば、じかに教育は授けられずともその学校には通っただろうし、普段もほど近いコミュニティにはいたはずである。するとどうしても目に入るのが一番弟子のユエだ。後年デカルトの論敵になる彼は大学のなかでも飛び抜けた秀才で、若くしてボシャルの国外行脚にまで同行、そしてアカデミーもまだ大した業績のない22歳の彼をすぐさま会員に加えている。街の大知識人たちに交わって議論する前途有望な先輩の姿を、輝かしいものとして十代のロスコモン伯が憧れたとしても不思議はないし、その思い出が彼をしてカンのアカデミーの再現をさせたのだろう。

王政復古期特有の、こういったフランスへの憧れ、さらにはその先輩を乗り越えようとする対抗心、はたまた裏返しの敵対心といったものが、この『訳詩論』には充ち満ちてい

る。そして翻訳アカデミーというサークル活動のなかで作られたこの詩は、ある種の趣意書として一丸となって、散文でない韻文の翻訳をなしていこうと、会員を鼓舞するものでもある。さらにこの詩論はのちドライデンの手により一連の『雑詠集』の第一とほぼ同時に出版されることで別の意味を持ち始め、続く『雑詠集』に参加しこれから文壇に出て行こうとする18世紀初頭の若い文士たちへのマニフェストとして、大きな影響を与えることになったのである。(なお詩行についての細かな分析や、当時およびその後の英文学・翻訳論との影響関係、後世の誤読等については、(大久保 2012b)を参照されたい。)

3. 訳文

『訳詩論 [初版]』

幸いなる哉かの著者よ、その真の論にて
 旧来のホラーティウスの法を見事に正す。
 なお幸いなるはかの者達ぞ、(居並ぶ星々、
 人々のさだめを詩戦にありとするならば)
 悠々と骨折ってその教えの下したためる、
 戦に備えその武具を会得できるがゆえに。
 ところが印刷・説教壇・舞台なるものが
 持てる力を結託し、当代を侵すがために、
 憤り奮起せる我らは断固、おのれの持つ
 いささかばかりの正義感に真当たるべし。
 なぜなれば、ローマなる倉の宝を求めん、
 ギリシアなる金脈で清き權を掘起さんと、
 人以上に焦がれ苦闘してきたは一体誰ぞ。
 至高の名の果実が早々洋々と移植されし
 我らが島では、芳しき花々が微笑むほど。
 御馴染オウイディウス今や精妙な念の源、
 して森羅万象がその穏かなる望みを助く。
 もはやテオクリトスは我らの所有にあり、
 アルビオンの断崖が田園の歌唱を飴せる。
 メディア人以上、豊穰なる東方を越えし、
 イタリアの祝福され様を耳にせぬ者なし。
 さらにひたむき真剣なるガッルスガッルスの詩は
 リュコーリスリュコーリスでさえも憐みの目するほど。
 嘆くニュムペーニュムペーが愛しのダプニスダプニスに仕う
 健気なる一節では誰しも心動かされ涙す！
 さあ音に聞け、何たる高尚なる調べにて

シチリアの詩の女神らが幸いの野の此方、
黄金時代、我らが日輪の御代を讃えるか！

内乱ののち国内が落ち着き、外地の戦も
平和と勝利とで有終の美を飾りしかの国、
フランスでは（王認の手により養われし）
学問が急成長し、あまねく当地を潤して、
希羅もが認める特選極上の多くの書物を
かの国の優れる訳者らが自国の物とせり。
ならば欧州は己が得たことを認めるべし、
よき模範でありつつ努力の賜物たるゆえ。
これ以後は我らの大々の対抗の番となり、
手を着けたる我ら見事同様に成遂げたり。
しかも我ら今やより高貴な道を世に示す、
訳詩においてはかの者共以上の出来映え。
清心静聴清声にホラーティウスが流れる、
これは散文では表し得ぬ甘美さであるぞ。
低級なる散文の説く原意はいかにも拙く、
匠の技にあらず素材そのまま見せるのみ。

（二〇年以上仕えてきた）小生としては、
一目見ればすぐにその真髓見て取れよう。
我らが隣人、望み薄にして無駄骨ばかり、
落度とは当人よりむしろその言語にあり。
なるほど豊かで華やか、耳にも悦ばしく、
我ら持てる以上の甘美があるかもしれぬ。
とはいえこれまでフランス作家のものに、
英語ほどの含蓄ある表現力などあったか？
本物の一行にある純銀の重厚の輝きとは、
フランス針金細工に比して横溢するもの。
小生、私ながらも公平な想念を語るのみ、
これは自由であり（もとい）他意もない。
フランスが我々ほど簡要に書けたのなら、
機知を力強く示せたなら撤回吝かでなし。
いかにも詩作とはひとときわ貴きものだが、
良い訳なるものたやすくできる技でなし。
それというも、題材知られて久しくとも、
人の手と空想いずれもが縛られるゆえに。

また過去の書き物うまく改めるとなれば、
産みの苦しみ減じても、悩み増すばかり。
さても、詩心靈感の種に適した土壌では、
はびこる銜いの草をしかと取り除くべし。
暗記狙いの語呂合せがなす爆音のせいで、
アポロンも驚愕、パルナソス山も動揺ぞ。
そもそも、読んで褒めてくれよう者など、
（学識のみならず）生まれのよき者だけ。
偉業（なかなか成らぬ難事）とは第一に、
人がおのれに対して誠実たることなるぞ。
見せかけごまかしなく最良遠慮もなしに、
自らの気を腑分けし、神経を調べること。
自惚れ、己が力量を頼みとする者はみな、
始めウェルギリウス、終りマエウイウス。
[.....]

[.....]

詩人それぞれ、個々の才にてものすもの、
ある者讃え、説く者あれば囁付く者あり。
ホラーティウスは叙事の桂冠ゆめ望まず、
高尚なるマロは叙情の歌に身をやつさず。
まずは汝の体液四種の混ざり具合を計り、
汝の神気を支配する質がいずれか求めよ。
そののち、己に向いた詩人を探すがよい、
友を選ぶが如く、その著者を選ぶことぞ。
この共感の絆でつながれば、汝は相手に
親しく懇ろに、して情を抱くようになる。
汝の思念・言葉・様式・魂が調和すれば、
もはや相手の解説者ならぬ相手そのもの。

うら若き詩の女神の、しどけなさたるや、
その乙女の令名の、なんと素敵なことか！
感じやすい年頃、純潔教育のあいだには、
まだ早いと汝も父親の如き優しき心ばえ。
あどけない胸のうちの第一の印象なれば、
最も深いものであるだけに最良なるべし。

上から威圧して奴隷の恐怖を生まぬこと、
処女の耳を汚すふしだらな音もいけない。
愚かにも思い上がりし気障な有り様から、
言葉だけの美辞の邪な誘惑から守るべし。
生得の無垢は思念一つ一つを引き立てる、
されば万一非行に走るなら、そは汝の咎。

[.....]

とはいえ良い主題持つのがすべてでなし、
得心のあかつきは楽しめるものたるべし。
くどくどしき代物を目の前に置かれては、
(新旧の例がおびただしくあるが如くに)
想像のなかがむかつく心象であふれ返り、
何もかも海葱の酸密よろしく退くばかり。

[.....]

元はホメーロスとはいえ、聖なるゴミを、
吐き気なく見られた者が今までいようか？
英雄に毒づかせ、神々をぼろぼろにした
いまいちな作者、鼾でもかいて居眠りか。
当方は嘔気ばかりか——マロはしかめ面、
ホラーティウスも見下げ果てたと憤慨ぞ。
我が詩の女神も赤面、怯えて引きこもる。
盲信的に褒め讃えるは好いた相手だけよ。

[.....]

(なかでも一番の急所である) 自惚れは、
無知ならびに思考の欠如から生じるもの。
精一杯苦心し、物事を消化する人間なら、
だいたい自慢するより気落ちしがちぞ。
つまり原著者がいい所の人物であるなら、
相手の理解を得るまで暇金がかかるはず。
ウエルギリウスの執筆以来、今や幾星霜、
いまだ理解する者がいかに少ないことか。
畏怖抱きつつその聖壇近づいたところで、
つまらぬ神格ではそこへ住めもせぬぞよ。

[.....]

ここ迄よく出来た例ばかり挙げてきたが、
 これらは他あらゆるものにも当てはまる。
 真正の意味を探さんと苦心惨憺するべし、
 汗を流せ、気を張れ、せっせと權をこげ。
 目を配り見つけられる限りの注解を探せ、
 ここそこ色々、詩人の心に行き当らんと。
 しかし盲信から衆愚に導かれるべからず、
 これまでも今においても時として誤りぞ。
 物事がどうにも不自然で難しく見えれば、
 引合いに出された原著者の方に相談せよ。
 アポロンの下さるはずの努力への報いの、
 祝福がいかなるものか誰も知る由もない。
 秘奥などやすやすと見つかるはずもない、
 だが一度発見なれば、疑いの余地もなし。
 真実が汝の恍惚の胸に確信を刻みつける、
 して平安と歓喜とが栄えある賓客となる。
 ただし疑念の影いささかでも残るのなら、
 およそ踏み均されし所が無難の道となる。
 恐怖とは、奴隷のさもしき連れ合いなり、
 ところが用心とは勇者の美德の極みたり。
 真実はいつも一つ、神々しく輝くものぞ、
 その天の光を曇らす疑いなどありえぬぞ。
 汝の思念のうちに少しでも迷いあるなら、
 惑いを残すだけで、訳すなど無理なるぞ。
 体裁をどこまで装おうと、露呈するもの、
 なぜなら人は知る以上を説くこと適わぬ。
 本文より解せしことしか明かせぬゆえに、
 その論じた部分にその点ありありと残る。
 名に対して形を重んじすぎる連中・輩は、
 霧晴らすというよりむしろ産み出す者共。
 そもそも潔癖すぎても不良が育つのが常。
 (なぜなれば頑迷とは悪徳になるからよ)
 [.....]

ある言語で雅に使われし言葉がそのまま、
 他の言語でも許容されるなどまずない事。

カエサル時代のローマで持囃された物が、この我らの才気や風土に合うとは限らぬ。わかるように語られた真意というものは、訳者の慎重さと大胆さをともに示すもの。原典からの逸脱は罪深い悪行に他ならぬ、足すくらいなら省いた方がまだましなり。調子のよき詩行を好みすぎるのも考え物、良き想念とは平易なる表現でこそ輝かん。それこそ匠の筆さばき操れる画家少なし、技術のなかでも最も一流のものなればだ。ここでは原著者が最良の助言となろうぞ、氏が落とせば落とし上げし際には上げる。わざとらしき音色はお粗末きわまりない、足りん三文文士として不名誉へ一直線よ。

[.....]

詩心の女神たる賢九姉妹の誰であろうと、汝の求めに喜んでその耳を傾け、さらに、永久の名に値せんと成功を鼓舞するなら、汝の頭には絶えぬ恩寵の炎が授かろうて。だが的外れにもかかわらず疑念が勝って、移り気だと汝を強風で煽ろうというなら、先ほどの加護の実りもみな失うてしまい、代りに当然、哀れ絶望の行く末あるのみ。

[.....]

[.....]

気持ちの昂ぶらぬ詩人などおらぬはずよ、書くにあたって感ぜしもので忘我の境地。汝も聞いたろ、クーマエの洞窟へ導かれ、我慢できぬと乙女が神々しくわめくのを。今も声が聞こえる、うるんだ目が見える、してあえぎ声、ほら！ 神よ神よと叫ぶ。己ならぬ言葉で、人の響き超ゆるもので、乙女の素直な魂は地でのたうちつつ泣く。だが天命あらば、我らは従うほかはなく、聖なる呼び声には人が逆らおうとも無駄。

汝の胸でざわつく魂の気配に気をつけよ、
 一〇奮い立てば一万が入るのだから。
 よって個々の極みを適切に用いるがいい、
 火照る靈感で書いた後、粘液質にて直せ。
 気持ちよい時間が十分すぎるほどに過ぎ、
 葡萄酒の泡が魅惑の杯で微笑む時の如く、
 して汝の脈は合図ののち、打たんとする、
 ふくらむ全身の血管を通じ、撤退の音を。
 ゆえに神意から機嫌よく詩神が招くなら、
 好意を逆手に、女神の高まりを悦ばせよ。
 だが精力ある熱に衰えが見られし際には、
 間合を取り、次なる呼出しを待つがよい。
 燦然たる日輪の前にあるかすかなランプ、
 純銀の刻印に対する合金を比べてみても、
 靈感輝く者から見たただの人の詩行ほど
 卑しいものであるとも思えないくらいぞ。
 一方力強く大胆、他方気怠くだらしない、
 方や冷たき挨拶だが、方や恋人の口づけ。
 [.....]

[.....]

細かなる耳で聞けばそこには見つからぬ、
 ざらついたところ、あるいは破格なども。
 高さも低きも、はたまた緩みも締めりも、
 どの音であれ常に想念への注解であるぞ。

韻律に長けし耳が先にあるべきなるゆえ、
 反訴もなしにあらゆる議論の決着がつく。
 古代ローマとギリシアこれを見つれたり、
 誤りたる休止にて音を汚してしまう前に。

天に靈感を受け、テュルタイオス歌えば、
 うなだれた兵士らも新たなる勇氣湧けり。
 息を吹き返せるスパルタ軍は戦闘を続行、
 して將軍二名の失いしもの詩人が得たり。
 何事をも包み込む天空の神秘なる力の下、

帝国なるもの、詩心とともにそびえ立つ。
真の詩人とは、国家の守護者たるものぞ、
その者しくじれば、そは終末の予言なり。
なぜならローマの征服を鼓舞せしものは、
ウェスタの乙女でなく詩神の炎なりけり。
天は祝福に同じ、陰りゆく時においては
逆る詩情の恍惚を感じぬのが必定なるぞ。

(蓋し) 韻なるものが多くの過ちの大本、
拘るあまり高上の決まりを軽んずる始末。
ギリシア・ローマで認知されざるものが
蛮人の手にかかってついに大洪水となる。
気圧され落ちぶれ、人はとうとう流され、
己が身を侵略者のやり方へと転じさせり。

なるほど苔むしたご神体の堅き大木から
トールとウォドンが二重の韻を口にする。
して世は下り時代は無知へと傾いてゆき、
詩人よろしく、僧も階音を鳴らし続ける。

今やアポロンと九聖神、祝福されたる国、
我らが国にて持てる輝きでもて燦然たり。
なぜ我らは彼ら古代の習わしを復元せぬ？
かつてのローマ・アテネのようにならぬ？
噫！ 生きて栄光の日を迎えさせたまえ！
アポロンへの賛歌を大勢で唱させたまえ！
この英国の詩神が意気揚々と勝鬨を上げ、
己が正直に蛮人の助けを退けんとする時、
かのローマの威光の下、過去最高のもの、
前人未踏のものが現れ出しあかつきには。

.....
【著者紹介】

大久保友博 (OKUBO Tomohiro) 京都大学大学院人間・環境学研究科博士候補生、大阪市立大学・白鳳女子短期大学非常勤講師。翻訳理論・英国翻訳論史専攻。〈大久保ゆう〉名義にて主にオーディオブック分野での文芸翻訳に携わる。連絡先：holmes@alz.jp

.....

【参考文献】

- Allen, R. J. (1967). *The Clubs of Augustan London*, Hamden: Archon.
- Amos, F. R. (1920/1973). *Early Theories of Translation*, New York: Octagon Books.
- Barclay, A. (2002). Dating Roscommon's Academy, *Restoration*, 26 (2): 119-126.
- Batten, Ch. L. (1974). Samuel Johnson's Sources for 'The Life of Roscommon', *Modern Philology*, 72 (2): 185-189.
- Brennan, K. S. (1981). Culture and Dependencies: The Society of the Men of Letters of Caen from 1652 to 1705. (Unpublished doctoral dissertaion) Johns Hopkins University, Baltimore.
- Brennan, K. S. (2003). Culture in the Cities: Provincial Academies during the Early Years of Louis XIV's Reign, *Canadian Journal of History* 38 (1): 19-42.
- Brown, H. (1934). *Scientific Organizations in Seventeenth Century France (1620-1680)*, New York: Russell.
- Caldwell, T. (1996). Honey and Venom: Dryden's Third Georgic, *Eighteenth-Century Life*, 20 (3): 20-36.
- Caldwell, T. (2004). Dryden and Denham, *Texas Studies in Literature & Language*, 46 (1): 49-72.
- Chamberlain, L. (1988/2004). Gender and the Metaphorics of Translation, *The Translation Studies Reader*, 2nd ed., New York: Routledge, 306-321.
- Chetwood, K. (1684). To the Earl of Roscommon, on His Excellent Poem, in Dillon (1984a).
- Clingham, G. (2001). Knightly Chetwood's A Short Account of Some Passages of the Life & Death of Wentworth late Earle of Roscommon: A Transcription and Introduction, *Restoration*, 25 (2): 117-138.
- Clingham, G. (2002). Roscommon's 'Academy,' Chetwood's Manuscript 'Life of Roscommon' and Dryden's Translation Project, *Restoration*, 26 (1): 15-26.
- Clingham, G. (2007). Samuel Johnson, Another and the Same, *Essays in Criticism*, 57 (2): 186-194.
- Cooper, Th. (1855). Lord Roscommon, *The Gentleman's Magazine*, Dec., 603-605.
- Cowan, B. (2005). *The Social Life of Coffee: The Emergence of the British Coffeehouse*, New Haven: Yale University.
- Cronin, M. (1996). *Translating Ireland: Translation, Languages, Cultures*, Cork: Cork University Press.
- Davis, P. (2008). *Translation and the Poet's Life: the Ethics of Translating in English Culture, 1646-1726*, Oxford: Oxford University Press.
- D'Addario, Ch. (2007). *Exile and Journey in Seventeenth-Century Literature*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Delater, J. A. (2002). *Translation Theory in the Age of Louis XIV: The 1683 De Optimo Genere Interpretandi of Pierre Daniel Huet (1630-1721)*, Manchester: St Jerome Publishing.
- Dillon, W. (1680). *Horace's Art of Poetry made English*, London: Herringman.
- Dillon, W. (1684a). *An Essay on Translated Verse*, London: Tonson.
- Dillon, W. (1684b/1971). *Horace's Art of Poetry made English*, 2nd ed., Menston: Scolar Press.

- Dillon, W. (1685/1971). *An Essay on Translated Verse*, 2nd ed., Menston: Scolar Press.
- Dillon, W. and Ch. Sackville et al. (1714). *Poems on Several Occasions*, London: Curll.
- Dillon, W. and E. Waller et al. (1717). *Poems*, London: Tonson.
- Doody, M. A. (1998). Gender, Literature, and Gendering Literature in the Restoration, *The Cambridge Companion to English Literature 1650-1740*, Cambridge: Cambridge University Press, 58-81.
- Dryden, J. (1680/1995). Preface to Ovid's Epistles, *The Poems of John Dryden*, v. 1, London: Longman, 376-391.
- Dryden, J. (1684a). To the Earl of Roscommon, on His Excellent Essay on Translated Verse, in Dillon (1684a).
- Dryden, J. (1684b/1995). To the Earl of Roscommon, *The Poems of John Dryden*, v. 2, London: Longman, 217-222.
- Dryden, J. (1685/1995). Preface to Sylvae, *The Poems of John Dryden*, v. 2, London: Longman, 234-257.
- Emerson, O. F. (1921). John Dryden and a British Academy, *Proceedings of the British Academy, 1921-1923*, 45-58
- Engetsu, K. (2004). Dryden and the Modes of Restoration Sociability, *The Cambridge Companion to John Dryden*, Cambridge: Cambridge University Press, 181-96.
- Frey, L. and M. (2004). Wentworth, Thomas, first earl of Strafford, *Oxford Dictionary of National Biography*, v. 58, Oxford: Oxford University Press, 142-160.
- Frost, W. (1988). *John Dryden: Dramatist, Satirist, Translator*, New York: AMS Press.
- Geduld, H. M. (1969). *Prince of Publishers: A Study of the Work and Career of Jacob Tonson*, Bloomington: Indiana University Press.
- Gildon, Ch. (1721). *The Laws of Poetry: Explain'd and Illustrated*, London: Hinchliffe and Walthoe.
- Gillespie, S. (1988). The Early Years of the Dryden-Tonson Partnership: the Background to their Composite Translations and Miscellanies of the 1680s, *Restoration*, 12: 10-19.
- Gillespie, S. (2004). Dillon, Wentworth, fourth earl of Roscommon, *Oxford Dictionary of National Biography*, v. 16, Oxford: Oxford University Press, 226-228.
- Gillespie, S. and R. Sowerby (2005a). Translation and Literary Innovation, *The Oxford History of Literary Translation in English*, v. 3, Oxford: Oxford University Press, 21-37.
- Gillespie, S. and P. Wilson (2005b). The Publishing and Readership of Translation, *The Oxford History of Literary Translation in English*, v. 3, Oxford: Oxford University Press, 38-51.
- Gillespie, S. and D. Hopkins (eds.) (2008). *The Dryden-Tonson Miscellanies, 1684-1709*, v. 1.
- Hammond, P. (1990). The Printing of the Dryden-Tonson Miscellany Poems (1684). and Sylvae (1685), *The Papers of the Bibliographical Society of America*, 84 (4): 405-412.
- Hammond, P. (1991). *John Dryden: A Literary Life*. New York: St. Martin's Press.
- Hammond, P. (1993). Figures of Horace in Dryden's Literary Criticism, *Horace Made New: Horatian Influences on British Writing from the Renaissance to the Twentieth Century*, Cambridge: Cambridge

- Unviersity Press, 127-147.
- Hammond, P. (1998). Classical Texts: Translations and Transformations, *The Cambridge Companion to English Literature 1650-1740*, Cambridge: Cambridge University Press, 143-61.
- Hayes, J. C. (2009). *Translation, Subjectivity and Culture in France and England, 1600-1800*, Stanford: Stanford University Press.
- Hippiau, C. (1865). BOCHART (Samuel), *Nouvelle Biographie Generale*, tome 6. Paris, 304-07.
- Hood, F. (1901). Roscommon: His Life and Works, *The Sewanee Review*, 9 (3): 257-274.
- Hopkins, D. (1986). *John Dryden*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hopkins, D. (2005). Dryden and his Contemporaries, *The Oxford History of Literary Translation in English*, v. 3, Oxford: Oxford University Press, 55-66.
- Hosford, D. (2004). Cavendish, William, first duke of Devonshire, *Oxford Dictionary of National Biography*, v. 10, Oxford: Oxford University Press, 664-71.
- Jacob, G. (1719). Wentworth Dillon, Earl of Roscommon, *The Poetical Register: or the Lives and Characters of all the English Poets, with an Account of their Writings*, v. 2, London: Curll, 43-46.
- Johnson, J. W. (1972). The Classics and John Bull, 1660-1714, *England in the Restoration and Early Eighteenth Century*, Berkley: The University of California Press, 1-26.
- Johnson, S. (1748). Life of the Earl of Roscommon, *The Gentleman's Magazine*, 18: 214-217.
- Johnson, S. (1779/2006). Roscommon, *The Lives of the Most Eminent English Poets; with Critical Observations on their Works*, v. 2, Oxford: Clarendon Press, 17-23.
- Jose, N. (1984). *Ideas of the Restoration in English Literature 1660-71*, Cambridge: Harvard University Press.
- Kelly, L. (1979). *The True Interpreter: A History of Translation Theory and Practice in the West*, New York: St. Martin's Press.
- Kettering, S. (1993). Brokerage at the Court of Louis XIV, *The Historical Journal* 36 (1): 69-87.
- Kitagaki, M. (1981). *Principles and Problems of Translation in Seventeenth-Century England*, Kyoto: Yamaguchi Shoten.
- Lipking, L. (1970). *The Ordering of the Arts: in Eighteenth-Century England*, Princeton: Princeton University Press.
- Lux, D. S. (1989). *Patronage and Royal Science in Seventeenth-Century France: The Académie de Physique in Caen*, Ithaca: Cornell University Press.
- Mason, H. A. (1990). Clique Puffery in Roscommon's Essay on Translated Verse?, *Notes and Queries*, 37 (3): 296.
- Morrah, P. (1979). *Restoration England*, London: Constable.
- Nemetz, A. (1961). The University and Society: A Perspective, *The Journal of Higer Education*, 32 (8): 425-434.
- Niemeyer, C. A. (1933a). The Life and Works of the Earl of Roscommon. (Unpublished doctoral dissertation) Harvard University, Cambridge.

- Niemeyer, C. A. (1933b). The Birth Date of the Earl of Roscommon, *The Review of English Studies*, 9 (36): 449-451.
- Niemeyer, C. A. (1934). The Earl of Roscommon's Academy, *Modern Language Notes*, 49 (7): 432-437.
- Niemeyer, C. A. (1939). A Roscommon Canon, *Studies in Philology*, 36: 622-636.
- O'Sullivan Jr., M. J. (1980). Dryden's Theory of Translation, *Neophilologus*, 64 (1): 144-159.
- Pearcy, L. T. (1984). *The Mediated Muse: English Translations of Ovid 1560-1700*, Hamden: Archon Books.
- Picard, L. (1997). *Restoration London*, London: Weidenfeld & Nicolson.
- Prevost, M. (1954). BOCHART (Samuel), *Dictionnaire de Biographie Francaise*, Tome VI. Paris: Letouzey, 743.
- Rashdall, H. (1936). *The Universities of Europe in the Middle Ages*, 3 vols. Oxford: Oxford University Press.
- Reiner, F. M. (1989). *Interpretatio: Language and Translation from Cicero to Tytler*, Amsterdam: Rodopi.
- Robinson, D. (ed.) (1997/2002). *Western Translation Theory from Herodotus to Nietzsche*, 2nd ed., Manchester: St. Jerome Publishing.
- Ryan, R. (1821). Wentworth Dillon, *Biographia Hibernica: A Biographical Dictionary of the Worthies of Ireland, from the Earliest Period to the Present Time*, v. 2, London: Warren, 96-99.
- Saunders, J. W. (1964). *The Profession of English Letters*, London: Routledge.
- Several hands (1680). *Ovid's Epistles Translated*, London: Tonson.
- Several hands (1684). *Miscellany Poems Containing a New Translation of Virgills Eclogues, Ovid's Love Elegies, Odes of Horace, and Other Authors: with Several Original Poems*, London: Tonson.
- Several hands (1685). *Sylvae, or, The Second Part of Poetical Miscellanies*, London: Tonson.
- Sheffield, J. (1682/1968). An Essay upon Poetry, *Critical Essays of the Seventeenth Century*, v. 2, Bloomington: Indiana University Press, 286-296.
- Shelford, A. G. (2007). *Transforming the Republic of Letters: Pierre-Daniel Huet and European Intellectual Life 1650-1720*, Rochester: The University of Rochester Press.
- Sherbo, A. (1985). Dryden as a Cambridge Editor, *Studies in Bibliography*, 38: 252-262.
- Smith, F. S. (1930). *The Classics in Translation: An Annotated Guide to the Best Translations of the Greek and Latin Classics into English*, London: Charles Scribner's Son.
- Sowerby, R. (1993). Pope and Horace, *Horace Made New: Horatian Influences on British Writing from the Renaissance to the Twentieth Century*, Cambridge: Cambridge University Press, 159-183.
- Sowerby, R. (2006). *The Augustan Art of Poetry: Augustan Translation of the Classics*, Oxford: Oxford University Press.
- Spingarn, J. E. (ed.) (1968). *Critical Essays of the Seventeenth Century*, v. 2, Bloomington: Indiana University Press.
- Stanford, W. B. (1977). *Ireland and the Classical Tradition*, Dublin: Figgis.

- Steiner, G. (1975/1998). *After Babel: Aspects of Language and Translation*, 3rd ed., Oxford: Oxford University Press.
- Steiner, T. R. (1970). Precursors to Dryden: English and French Theories of Translation in the Seventeenth Century, *Comparative Literature Studies*, 7(1): 50-81.
- Steiner, T. R. (ed.) (1975). *English Translation Theory, 1650-1800*, Amsterdam: Van Gorcum.
- Stuart, D. M. (1937). Roscommon of the 'Unspotted Bays', *English*, 1: 140-150.
- Trickett, R. (1967). *The Honest Muse: A Study in Augustan Verse*, Oxford: Clarendon Press.
- Tytler, A. F. (1813/1978). *Essay on the Principles of Translation*, Amsterdam: John Benjamins.
- Uman, D. and B. Bistue (2007). Translation as Collaborative Authorship: Margaret Tyler's *The Mirrour of Princely Deedes and Knighthood*, *Comparative Literature Studies*, 44 (3): 298-323.
- Venuti, L. (2001). Neoclassicism and Enlightenment, *The Oxford Guide to Literature in English Translation*, Oxford: Oxford University Press, 55-64.
- Winbrot, H. D. (1969). *The Formal Strain: Studies in Augustan Imitation and Satire*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Widmann, R. L. (1967). *The Poems of Wentworth Dillon, Earl of Roscommon (1637-1685): A Critical Edition*. (Unpublished doctoral dissertation) The University of Illinois, Urbana.
- Winn, J. A. (1987). *John Dryden and His World*, New Haven: Yale University Press.
- Winn, J. A. (1992). *When Beauty Fires the Blood: Love and the Arts in the Age of Dryden*, Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Winn, J. A. (2000). 'According to my Genius': Dryden's Translation of 'The First Book of Homer's Ilias', *John Dryden: Tercentenary Essays*, Oxford: Clarendon Press, 264-281.
- Womersley, D. (ed.) (1997). *Augustan Critical Writing*, London: Penguin.
- 大久保友博 (2010) 「翻訳における一軸的批評の解体」 日本通訳翻訳学会第 11 回年次大会口頭発表
- 大久保友博 (2011a) 「ジョン・デナムの翻訳論——〈作品〉への予感」『歴史文化社会論講座紀要』 8: 49-68. 京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化社会論講座
- 大久保友博 (2011b) 「ジョージ・スタイナーと翻訳の現象学」 日本通訳翻訳学会関西支部第 27 回例会口頭発表
- 大久保友博 (2011c) 「私訳 : George Steiner's *After Babel*」 日本通訳翻訳学会関西支部第 27 回例会配布ハンドアウト
- 大久保友博 (2011d) 「近代英国翻訳論——解題と訳文 ジョン・デナム 二篇」『翻訳研究への招待』 6: 17-31. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
- 大久保友博 (2012a) 「近代英国翻訳論——解題と訳文 ジョン・ドライデン 前三篇」『翻訳研究への招待』 7: 107-124. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
- 大久保友博 (2012b) 「ロスコモン伯と翻訳アカデミー」『関西英文学研究』 6(2012): 13-20. 日本英文学会関西支部
- 大久保友博 (2013) 「近代英国翻訳論——解題と訳文 キャサリン・フィリップス 書簡集(抄)」

- 『翻訳研究への招待』 9: 129-140. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
佐藤勇夫 [編] (1980) 『ジョン・ドライデンの翻訳理論』 北星堂書店
佐藤勇夫 [編訳] (1988) 『ドライデンと周辺詩人の翻訳論』 ニューカレントインターナショナル
藤井哲 (1990) 「Johnson による Johnson の "Life of the Earl of Roscommon" への加筆について」『福岡大学総合研究所報』 129: 61-94.
藤井哲 (1992) 「18 世紀における Samuel Johnson による "Life of Roscommon" の位置付け」『福岡大学総合研究所報』 138: 1-34.